1 いま，再びの森林官として思うこと

青森営林署　北八甲田森林官　及　川　隆　視

1　はじめに

私は，昭和３５年から４年５ケ月の間，担当区主任を経験をしているが，３０年経過したいま，職名変更した森林官として青森営林署北八甲田森林事務所に勤務している。私は，昭和６２年から，青森営林局において職員研修業務を担当したなかで，新たに森林官となる研修生や，現に森林官として活躍している研修生に接するたびに，心密かにもう一度現場において森林官を経験してみたいものと思っていたものである。

平成６年度に首席森林官制度創設を機会に，退職までの１年間ではあるが，再び森林官として現場森林事務所に勤務させてもらった経験のなかから，これからの森林官像を考えてみた。

2　地元との人間関係，協調関係

最初に担当区主任として発令された勤務地は，営林署から１２㎞離れた戸数１００戸，今ではスキーリゾート地として有名な，鰺ケ沢スキー場のある西岩木山麓の鰺ケ沢町長平町である。町とはいっても特別な公共施設もなく，複式の小中学校が唯一という公共交通機関のない典型的な孤立辺地であった。

当時私の現場経験は直営生産事業の補助員のみで，営林署の出先機関の責任者として希望と不安の交錯する身のしまる思いであったことを，今なお覚えている。

着任当日は，共用林組合，部分林組合，木炭組合，所属作業員，又，隣近所の方々が，出迎えてくれたが，これからこの辺地で任務を遂行するには，この人達の協力なくしては不可能と思い，人間関係を大切にすることが最善の策と考えたものである。

地域の様子がわかりかけてきたころ，仕事の合間になるべく地元の人達との接触を深めていき，住民多数が担当区事務所に顔を出してくれることを願い，大枚奮発して長平部落で初めてのテレビを購入し，劇場もどきに事務所をオープンにした。

多くの住民が訪れてくれたが，夜ともなると酒を酌み交わすなか，民情，風習，考え方，営林署への要望など気兼ねなく話して貰えたものである。こうして部落住民と触れ合うなかで，地元の事情が手にとるようにわかるようになり，任務遂行の一助になったものである。プライベートな面と仕事を結び付けることは，今の時代では多少の批判はあろうが，当時としては辺地に住んで，地域を通じて仕事を進めて行くために，よりよい人間関係，協調関係を築く有効な方法であったのではないかと思っている。

3　林野巡視と境界巡検

国有林に経済的依存度の高い当時としては，稼業用材，製炭原木，自家用薪材の払下げと，臨時雇用による労賃収入を通じて，部落住民の「役所の山は俺たちの山」という共通した思いから，国有林への協力度合いは非常に高く，薪炭共用林組合をはじめとして，それぞれが交替で，自主的に林野巡視をやって貰ったものである。

林野巡視をする人達は，その流域毎に国有林界と境界標識の種類番号を熟知しており，巡検業務を進めるうえで大いに助かったものであり，いま思えば隔世の感がするところである。林野巡視としての臨時雇用を造林予定簿に計上出来た時代であり，今の時代と比べて林野巡視の濃淡度に違いがあることは否めないところである。

4　造林事業実行と収穫調査

森林官の業務のなかで，造林事業実行と収穫調査が重要な業務の一つであることは，当時と現在も変わりないが，当時は比較的事業規模の大きい担当区には補助員が配置されていた。担当区事務所には自転車が貸与されており主任が使うことになるが，作業員等は現場山泊でないときは徒歩通勤で現場に通ったものである。暫くの後徐々にオートバイが導入され各種の事業実行が機動的になり，行動範囲も広がって合理的になったものだが，歩くことによって林相等山の様子がよくわかったときに比べ，自動車を使用し，目的地点まで一気に到達する現在，機動性と行動範囲の拡大が進んだ反面，その途中の山の事情を見落としがちになるのではと，一長一短の感を強くする昨今である。

また，当時あたかも，木材需要の増加の折柄，林力増強計画が実施されており，伐期齢の短縮と成長量の増大を図ることも考えられ，大面積一斉皆伐，拡大造林により，収穫量，更新保育等の事業量もそれ相当のものとなったものであるが，奥地の未開発林分の積極利用の命題のもとに，その収穫事業と跡地更新には全勢力を挙げて立ち向かったことでもあった。現在は業務改善の観点から当時からみると，相当思い切って簡略された収穫調査方法も採用され，しかもパソコン導入によりそのとりまとめも容易となっているが，算盤併用の手動式計算機の騒がしい音で夜遅くまでかかって調査復命書を作成し提出したことが懐かしい思い出でもある。

私は当時，樹高測定にはワイゼ式測高器を多用したが，いまでは測定誤差の少ないブルーメライス測高器などがあり，非常に便利になったものだと驚嘆をしているところである。造林事業は機械力もなく全て手工具の人海戦術の作業であったが，いまは機械力も導入され，楽に，能率もよく，仕上がりのよい作業ができるようになり，機械化の遅れている林業とはいえ，時の進歩を感ぜずにはいられない。

5　林業労働事情と地元関係

当時の担当区の労働事情は，夏は農業の傍ら造林事業に出役し，冬は自家製炭に従事する地元の実態から，固定労務は定期作業員（6上）を雇用し，各作業の最盛期には，日々雇用の作業員を多数雇用し，適期に短期間で，地拵，植付，下刈等に従事させるのが通例であった。日々雇用の労務提供は地元に割当てられた，いわば義務人夫というのが実態であるが，その労賃は地元にあっては貴重な副食物購入の糧となった唯一の現金収入であったのである。国有林と地元のこうした絆も，間もなく薪炭から石油へとの燃料革命，林業労働の専業化，そして国有林造林への請負導入等の時代の変遷を経ながら，出稼ぎ者の急増とともに，希薄になっていったものである。

6　期待される森林官像

国有林がこれから確立していく森林の流域管理システムのもとで，民有林と一体とな

って森林の有する公益的機能の発揮，林産物の計画的持続的な供給，農山村地域振興への寄与等のいろいろな要請に応えていくためには，現場第一線の森林官の果たす役割に大きな期待がかかるものと思っている。

（1）フォレスターと地元

国有林にあえて経済的基盤を求めなくなった農山村地域住民は，いまや都市生活者との所得格差もなくなり，生活レベルも都市部と何ら変わりないものとなった。

このように状況が変化するなかで，地域住民は都市型指向となっているが，彼らの住む郷土には，森があり，林があり，木があることによって，これからも私たち国有林のいろいろな施策を身近なものとして見守りながら，種々の価値感を持ちつつ生活を続けていくものであり，森林事務所に勤務する森林官は，ともすれば地域事情に疎遠になりがちとなるが，あらゆる機会を把え，地域の諸行事には積極的に参加して情報交換につと，営林署と地元とのパイプ役になることが大事であり，またフォレスターとしての使命と考えるものである。

（2）森林施業における先端技術者として

森林官が優れた「技術者」であるとともに，地域における林業技術の指導者でもあることが求められてくる。そのためには，日常よく山を歩き，山に問いかけ，山をよく観て自己の林業技術の向上を怠らないことが，大切なことである。いつも疑問心を，そして研究心をもち常に現状の改善意識をもって，独善的結論を持たないこともまた必要なことでもある。いろいろな学説，研究成果のあるなか創意工夫しながら，その現場に応じた合理的結論を得る素養を身につけることも必要であると考える。

（3）各事業実行上のリーダーシップ

国有林野事業の健全経営を目標に自助努力の折柄，森林官の業務を通じたリーダーシップはますます重要なものとなっている。営林署の現場における実行責任者として，所属作業員，出入り関係の人々に，森林官の言動が与える影響は極めて大きいものがある。親近感のある態度，常に相手の立場に立った考え，控えめな態度での話し合い等，風透しよく明朗な態度で臨みたいものである。そのことがお互いに理解しあえる良好なコミュニケーションを得られることができるのである。お互いに共通の話題で多くの人たちに，その気になってもらう話しの持ち方が，リーダーシップを発揮していくうえで最も有効な方法と考えるものである。

7　おわりに

今後森林官に任用されるであろう若年職員に，前後二度にわたる森林官業務の体験から，森林官の今昔，そしてこれから期待される森林官としての姿を直言したつもりであるが，国民各層の価値観の多様性が多い現状から，現場にあっては業務を通じての悩みは多い時代なのかもしれない，このようなときこそ営林局，営林署，森林事務所とも一糸乱れない意志一致のもと国民の負託に応えよう。